

一

次の各問いに答えなさい。

問一 — 部のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) この説は広くルフしている。
- (2) 景氣回復のヨウソウを呈^{てい}する。
- (3) セイキユウに事を決するな。
- (4) 人のイヒヨウをつく行動をとる。
- (5) 問題点をレッキョする。

問二 — 部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- (1) 生徒の判断に委^いねる。
- (2) 明^あるい兆^しが見える。
- (3) 自分の考えを強^いいる。
- (4) メンバーから外^はす。
- (5) 事件の真相を暴^はく。

問三 各文の空らん^{らん}に当てはまる「ことわざ」を、後の【語群】よりそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- (1) でしゃばらずにおとなしくしていなさい。「」と言うだろう。
- (2) そうしたいと思っていたところだから、まさに「」だね。
- (3) 「」で、彼の短気な性格は何年も直らないだろう。
- (4) 強く出るばかりがいいとは限らない。「」と言うからね。
- (5) 借金を申しこんだが、「」と言って貸してくれなかった。

【語群】

- ア 渡りに船
- イ 無い袖は振れぬ
- ウ 柔よく剛を制す
- エ 犬も歩けば棒にあたる
- オ 三つ子の魂百まで

問四 敬語について書かれた次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

- 尊敬語は、たとえば「お聞きになる」「お思いになる」のように、もともになる「聞く」「思う」という動詞に、「お」になる「を」をつけて使う場合が多い。しかし、例外もいくつかある。たとえば、「着る」という動詞の尊敬語は、①「お□□になる」が正しい言い方であって、「お着になる」という言い方は誤りだ。同じように、「寝る」も「お寝になる」とは言わずに②「お□□□□になる」と言う。また、「行く」という動詞も「お行きになる」ではなく「おいでになる」という言い方が一般的である。この「行く」という動詞は、「おいでになる」のほかに、「いらっしゃる」と言うこともできる。さらに、この「いらっしゃる」には③「行く」以外の意味もあるので注意が必要だ。この「いらっしゃる」のように「お」になる「を」につけない尊敬語がいくつかある。たとえば「言う」の尊敬語は④「□□□□□□□□□□」、「食べる」の尊敬語は「めしあがる」である。ちなみに、「言う」「食べる」の謙譲語は、それぞれ「申し上げる」、「□□□□□□□□□□」である。

- (1) ①・②・④・⑤の□に当てはまるひらがなを答えなさい。ただし、□一つを一字分とします。
- (2) 傍線部③「『行く』以外の意味」に当たるものを次の中からすべて選び、記号で答えなさい。
 - ア 佐藤さんとおっしゃる方が、先生に会いにいらっしゃいました。
 - イ 先生はいつまでこちらにいらっしゃるご予定ですか。
 - ウ 昨日、学校にいらっしゃる途中の先生をお見かけしました。

【第1段落】 ケータイやネットが **A** 化した情報時代になって、言葉にたいする私たちの態度も変化しました。言葉をコミュニケーションのたんなる道具とみなす傾向が、強まっているようです。けれど言葉は、金槌や鍋のような形のある具体的な道具ではない。そのことを忘れて、^② いとも簡単に操れるかのように誤解しては危険です。当たり前のことですが、言葉は意図せぬかたちで相手に伝わったり、あるいはブーメランのようにもどってきて、自分を傷つけたりもします。

【第2段落】 また言葉は口に出したとたんに相手、あるいは自分の気持ちを伝えることもあります。たとえば葬儀に際して弔辞を読む。あらかじめ原稿を用意するとき、故人への思いを言葉に書き連ねていく。そのとき、どんな言葉が故人を見送るのにふさわしいか、どんな弔辞にすれば恥ずかしくないか、などさまざまなことを考えて言葉にします。そして、当日弔辞を読み始めたたん、不意に涙があふれ読めなくなる。そういうことがあります。平静に読み通すことができると思っていたのに、思わぬ感情のほとばしりに自分で驚くということがありますね。言葉は他者へのメッセージを伝えるだけでなく、自分の心や相手の心にも思わぬ作用をおよぼすのです。

【第3段落】 会話だけでなく、文章を書くときもおなじです。言いかえたり、削ったり加えたりという文章の吟味と推敲のプロセスを通して、言葉を連ねていくうちに、^④ 自分の考えがどこにあるのかつきとめられたり、自分の気持ちが整理されたりということもあります。言葉にすることで、自分でも意識していなかった怒りや哀しみが、突如こみあげてくることもあります。

【第4段落】 「言葉は道具にすぎない」という誤解は、すでに自分の内面には常にはつきりとした感情や意思、知識が存在していて、それを井戸から水を汲みあげるように言葉という道具を使ってとりだし、相手に伝えることができるというシンプルな考え方から発生するのではないのでしょうか。

【第5段落】 幼いころのある光景が思い浮かびます。父や母は親戚のところに行くとき、私も連れて行くことがあります。玄関に入って座敷に上がったとき、そこで不思議なことが始まります。親と親戚がなにやら聞いたこともない言葉、もぐもぐ、むにやむにやと意味不明の言葉を発しながら、何度も畳に額をこすりつける。幼い私にはそれが挨拶だとは分からず、^⑤ ひどく奇妙な儀式に思えて、じっと見入っていた記憶があります。「大変ご無沙汰し……むにやむにや、もぐもぐ……お元気でなにより……むにやむにや、もぐもぐ」この呪文のような言葉の交換が終わると、神妙な顔つきが一変して、ふだんの笑顔にもどります。「まあ、今年はずいぶんと冷えこむわねえ」

【第6段落】 この変貌に私はついていきませんでした。年に一回は顔を合わせる間柄にもかかわらず、そんな儀式のような言葉のやりとりを繰り返す。昭和三〇年代の日本ではごくふつうの光景でした。^⑦ 最近ではほとんど目にするのがなくなりました。手紙でも時候の挨拶を目にすることが減りました。というより手紙自体をあまり出さなくなった。メールで時候の挨拶を目にすることはめったにありません。

【第7段落】 こうした一見どうでもいい挨拶、なくても困らないような言葉のやりとりがなくなっていく背景には、コミュニケーションにスピードと **B** 化を追求する情報社会の傾向が影響しているのでしょう。私は一見無駄に見える挨拶などは、^⑧ 暴走する言葉を納める「鞘」のような役割を担っていたのではないかと考えます。言葉は放っておくと暴走する、ということをおかたての人々は熟知していた。だからこそそうした「無駄な言葉」によるやりとりで、言葉の暴走を食い止めるようとしていたとも思います。

【第8段落】 **C** 化された、定型化された言葉というのは、宗教的な場ではじつに当たり前に存在します。儀式と宗教活動の中心に、たとえば聖書、コーランがあり、[※] 日本でも経文や祝詞があります。葬儀や結婚式という **D** 化された儀式では人はどうしても感情的になります。言葉にならない、あるいは言葉を探し求めている感情は、自分の言葉に出会うと爆発したり、人を傷つけたりします。コントロールできない事態もあります。こうした儀式において、定型化された

言葉の連なりをたよりにするのは、言葉がともすればコントロール不能になるということの人々が知っていたからだ、と私は考えます。

【第9段落】「鞘」を失った言葉はときに暴走します。電子ネットワーク上の掲示板、2ちゃんねるなどでは、攻撃的で露骨な誹謗中傷が吹きあれることがある。これも電子ネットワークという場が「鞘」を排除する性格があり、さらにそこには世間もクウキという秩序もないということからきています。情報社会が生み出した新しい環境は、言葉が暴走しやすいようにできているのです。

(藤原智美「検索バカ」)

※注 ・ 弔辞……告別式などで人の死を悲しんで述べる、おくやみのことば。

・ 推敲……十分に考えて、練りなおすこと。

・ コーラン……イスラム教の聖典。

・ 経文……仏教の教えが書いてある文章。

・ 祝詞……神さまに対して、神主が読み上げる文章。

・ 誹謗中傷……根拠のないことや悪口を言いふらして他人を傷つけること。

問一 ― 部①「言葉にたいする私たちの態度も変化しました」とありますが、この「変化」に影響を与えたと考えられるものを次の中からすべて選び、記号で答えなさい。

ア 手書きの手紙

イ 携帯電話のメール

ウ 葬式で読む弔辞

エ 結婚式での祝詞

オ 訪問時の時候の挨拶

カ インターネットの掲示板

問二 ― 部②「いとも簡単に操れるかのように誤解しては危険です」とありますが、この「誤解」はどこで起こるから生じると筆者は考えていますか。その考えが簡潔に述べられている「段落」を答えなさい。

※たとえば【第2段落】であれば「2」と答えなさい。

問三 ― 部③「プロセス」の意味を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 技術

イ 診断

ウ 交換

エ 過程

問四 ― 部④「自分の考えがどこにあるのかつきとめられたり、自分の気持ち整理されたりということ」とありますが、この状況を次のように簡潔に言い換えた場合、空らんにはまる言葉を漢字二字で答えなさい。

◎ 自分自身を□□的に見つめることができるということ。

問五 ― 部⑤「ひどく奇妙な儀式」とありますが、これは何のことを指していますか。【第6段落】より五字の語句を探し、最初の二字を抜き出して答えなさい。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

【本文までのあらすじ】

「わたし」（福田佳代）は中学校の教員をしている。幼い息子（豪）を毎日保育園まで送り迎えし、教師としての仕事もそつなくこなしているが、実際は心身ともにぎりぎりのところで踏ん張っている。サラリーマンの夫は忙しいため、息子の世話「わたし」が全面的にみている。ただ、息子は熱を出しやすく、近くに住む母親に保育園まで迎えに行ってもらうこともたびたびある。母親には面倒をかけて申し訳ないという気持ちがあるが、一方で、共働きだから子どもにそのしわ寄せが及んでいる点を指摘されると、反発してしまう。

子育てや仕事のことで母親と言い争いをしてしまった翌日のこと。「わたし」は、顧問を務めているバスケットボール部の森美帆という生徒について、彼女の担任の水原先生より相談を受ける。彼女の言動が最近不自然であるというのだ。その原因は家庭環境にあった。美帆の父親はとてやさしく、家族を大切にしてくれる人だが、母親の再婚相手のため実の父親ではない。その母親にまもなく赤ちゃんが生まれる。複雑な気持ちに揺れ動く美帆は学校を休んでしまった。心配した「わたし」は美帆に連絡し、遅刻でもいいから登校して部活動だけでも出るよう伝え、美帆もそれに従う。部活動の後、「わたし」は赤ん坊との生活の実態を美帆に見せるため自宅へ招き入れる。

【本文】

【第1段落】

① 特別なことはしない、と決めていた。

美帆さんが一緒に、いつでもどおり学校を出て、いつでもどおり混み合った電車に揺られ、いつでもどおり急いで保育園に

豪を迎えに行く。そうしないと意味がないんだ、とも思う。

学校を出た頃は、美帆さんはふんどおり口数が少なかった。でも、すっきりした顔をしている。部活で思いきり汗をかいたことに加え、さつき森さん（美帆の父親）からわたしの携帯電話に、お母さんの容態は安定しているから、という連絡が入ったことも大きいのだろう。

「……けっこう混んでるんですね」

電車に乗って吊革につかまると、美帆さんは小声で言った。「ピークの時間はこんなものじゃないんだから」とわたしが笑って応えたと、うそ、と目を丸くする。

どんなにおとなびていても中学生はやっぱり中学生だなあ、と思うのは、こういうときだ。地元しか知らない。この子たちの世界はまだまだ笑ってしまうほど狭くて、小さくて、だからこそいとおしい。

「高校に入って電車通学になったら、満員電車にも鍛えられるわよ」

「なんか、疲れそう」

「疲れる疲れる、学校に着くまでに一仕事終えてる感じだから」

ですよねー、とうなずいた美帆さんは、頬に浮かんでいた笑みを、すっと消した。

わかるよ、とわたしもうなずいて、美帆さんの顔を見ずにつづけた。

「高校に入ったら下宿したいんだってね」

「……え？」

「聞いたの、お父さんから」

美帆さんは黙って吊革を握り直し、窓にうつすらと映り込む自分の顔をじっと見つめた。

「一人暮らしって、やっぱり懂れるよね。わかるわかる。水原先生なんて、この歳になってやっと初めて一人暮らしする

んだって言って、張り切ってるんだから」

返事はない。雨に濡れた窓の向こうで夕暮れの街明かりが揺れながらにじんでいる。

「家にいたくないの？」

「……だって、わたしがいると、部屋が狭くなるし、わたしも赤ちゃんが一緒だと勉強とかできないし……邪魔でしょ、やっぱり」

電車がブレーキをかけてスピードをゆるめた。もうすぐ駅に着く。

【第2段落】

駅から保育園まで、雨の中を歩いた。

「保育園って、駅から家までの途中にあるんですか？」

「ううん、ウチは駅の東口のほうだから、こっちは正反対」

「じゃあ……遠回りしてるんですか？」

「そう、毎日毎日、ウチから駅を通り越して保育園まで行って、駅まで戻って、片道三十分ぐらいかな」

笑って答えると、美帆さんは **A**。 「しょうがないのよ、他に空きのある保育園がなかったんだから」とつぶけたあとも、美帆さんの表情には微妙に不満が残っていた。

「おとなの世界は厳しいんだよ。なかなか思いどおりにならないんだから」

「後悔しますか？」

「なにを？」

「だから……いろんな、大変なこと……」

言いたいことはわかるから、ふふっと笑って、「ちよっと待ってて」と答えを先送りした。

保育園の中に入り、一歳児以下の『めばえ組』の教室を覗くと、保育士さんが笑顔で挨拶してくれた。よかった。今日の豪は熱も出さず、朝からずっとご機嫌だったらしい。

豪を抱き取って、美帆さんを振り向いた。

「大変なことばかりだよ、ほんと」

でもね、とつぶけた。

「大変なことがたくさんあると、ちっちゃなラッキーがうれしいよね」

美帆さんは首をひねるような、うなずくような、 **B**。 なんとなく、くすぐったそうな顔をしているようにも見えた。

抱っこ用のキャリーに入れた豪を右手で胸に抱きかかえ、左手で傘を差して歩きだした。左肩にキャリーの肩紐、右肩にはショルダーバッグの肩紐を掛けて、よいしょ、よいしょ、と歩く。

「重くないですか？」と美帆さんが訊く。

「重いし、蒸し暑くて大変」

「ですよね……」

「ちよっと代わってみる？」

ショルダーバッグを持つのだと思い込んでいた美帆さんに、「バッグは先生が持つから、美帆さんには赤ちゃんをよろしく」と笑った。

⑦「え、でも、そんなの……」

「しっかりとがんばって」

抱っこ用のキャリーごと、豪を渡した。小さな小さな命を預けた。赤ちゃんの重さを体で感じるのとは生まれて初めてだったのだろう。美帆さんの足取りはいかにも頼りなかった。ちよっと歩いては立ち止まり、よいしょつ、と豪を右手で抱え

直して、また歩きだすと、今度は左手に差した傘が傾いて落っこちそうになって、すぐに足を止める。

「先生……こういうの毎日なんですか」

「雨が降ってなかったらベビーカーなだけどね、それはそれで大変なのよ。歩道の段差も多いし、自転車もびゅんびゅん来るし、犬を散歩させてるひともいるし」

「犬にも関係あるんですか？」

「だって、ちょっと大きな犬になると、ベビーカーの赤ちゃんと顔の高さが一緒になるんだよ。それで吠えられたりしたら、赤ちゃんだってびっくりするわよ」

歩き煙草も気になる。バスやトラックの排気ガスだって心配だ。いちいち言いだせばきりが無いというのはわかっていても、それでも、やっぱり、赤ちゃんを育てるのって大変だよ……と、つぶやきも漏れてしまう。

「ベビーシッターさんとかにお願いすればいいのに」

あっけらかんとした言い方に、かえって力の抜けた苦笑いが浮かんだ。

「気軽に言わないでくれる？ お金だってかかるんだし」

「あ、そうか……すみません」

美帆さんは C。

そろそろいいかな、もうだいじょうぶかな、とわたしは慎重に本題を切り出した。

「美帆さんのお母さんだって、あなたが赤ちゃんの頃は大変だったと思うよ」

少し間をおいて、「そうだった、みたい」と美帆さんは応えた。「最初の結婚のときは駆け落ち同然だったって言ったから」

わたしは黙ってうなずいた。美帆さんの実の父親はひどい人だったらしい。ろくに働きもせず、ギャンブルとお酒、そ

して家に帰ると美帆さんの母親に暴力をふるう毎日だったと、昼間、森さんから聞いた。

「離婚が成立するまで、けっこう苦労してきました、ウチの母」

森さんもそう言っていたのだ。ずっと苦労してきたからこそ幸せにしたい、女房も美帆も、私が幸せにしたいんです、と目に涙を浮かべて言っていたのだ。

横断歩道で信号待ちをするときに、豪の抱っこを代わった。ほっとした顔で「汗びっしょりになっちゃいました」と言う美帆さんに、「明日は筋肉痛かもよ」と脅してやった。「すごくヘンな歩き方してたもん」

実際、ぎこちない歩き方だった。肩や肘や腰によけいな力が入っていた。慣れないうちは赤ちゃんを抱っこして歩くのはほんとうに疲れるし、ベビーカーを押すのだって、最初のお散歩のときには両手がパンパンに張って、腰まで痛くなっていたのだ。

「だって……重かったし……」

わかるわかる。赤ちゃんというのは、同じ十キロでも、水や砂の十キロよりもしりとした重みがあるものだ。□□□□^⑧
「□をパパやママに預けて、すべてをゆだねてくれるぶんの重さがあるためだ、と思う。」

「でも、すごく優しそうな抱っこだったよ」

「……そうですかあ？」

美帆さんは照れくさそうに笑って、豪を抱っこした余韻を味わうように右の手のひらを見つめ、「ほんとに赤ちゃんって熱いぐらい温かいんですね」と言った。

「あなただってそうだったんだよ」

一瞬きよとした美帆さんは、ですね、とうなずいた。

「で、お母さんだって、いまみたいに抱っこしてたの、あなたのことを」

今度は、黙^{だま}ってうなずく。

「親に苦勞かけてるのよ、子どもはみんな。どんなに親孝行なひとだって、赤ちゃんの頃は、みんな親に苦勞かけてるの」ねー、そうだよねー、と抱っこした豪を軽く揺すりながら顔を覗き込んだ。豪はにこにこ笑ってわたしを見つめる。その笑顔に後押しされて、わたしは美帆さんにつづけた。

「どうせなら、もうちょっと苦勞をかけてあげなさい」

「え？」

「赤ちゃんが生まれたら自分が邪魔になるとか、お父さんとお母さんと赤ちゃんのために自分だけ家を出ちゃおうとか、そんなナマイキなこと考えないの」

「でも……」

「親のスネってね、子どもが思っているより太くてじょうぶだよ。しっかりかじりなさい」

でしょ、と笑った瞬間——なぜだろう、ウチの母の顔が浮かんた。

【第3段落】

家に帰ると、豪をベビーサークルの中で遊ばせて、大急ぎでお風呂の準備をする。お湯を入れるだけではなく、乾燥モードにしておいた浴室から洗濯物を取り込んで、畳^{たた}んで、アイロン掛けも終える。それから晩ごはんの支度。炒めものや焼きものなど火を使う料理を先にやってしまう。煮込み料理は魔法瓶のように二重構造になった鍋を使って、余熱で火を通していく。

「炒めものとか先に作っちゃうと、冷めちゃうんじゃないですか？」

※怪訝^{けげん}そうに訊く美帆さんは、まだ赤ちゃんのいる暮らしがリアルには想像できないのだろう。

「ご機嫌^{きげん}なうちがチャンスなの。サークルの中でおとなしく遊んでくれてるうちに、アイロン掛けも火を使う料理も、と

にかく危なそうなのは、ぜんぶやっとなかないと……」

説明するそばから、豪がぐずりはじめた。外に出たいのだ。這い這いをして部屋中を動きまわりたいのだ。ママに抱っこもしてほしいし、おなかも空いたし、眠たくもなっているのだろう。あとちょっと。この野菜を切って、軽く炒めて、お鍋^{なべ}に放り込んで……。

「美帆さん、悪いけど、そのへんにあるオモチャを適当にサークルの中に入れてくれる？」

「……抱っこしてましようか？」

ありがと、とわたしは笑って、首を横に振った。

「遊びたいときに無理やり抱っこしちゃうと、おなかを蹴^けられたり、顔をひつかかれたり、もう大変なのよ。シロウトさんには無理無理」

「そんなに暴れちゃうの？」

「遠慮^{えんりょ}や手加減なんてないからね、赤ちゃんには。なにをするにも一所懸命^{いけんめい}なんだから」

泣き出した。「火のついたように」という比喻^{ひゆ}は、豪が生まれるまではただのレトリックにすぎなかった。でも、この一年足らずの間に、つくづく実感した。赤ちゃんはほんとうに、炎が燃え上がるように、^⑩身^みを^をかけて泣きわめくのだ。自分の欲しいもの、やりたいこと、嫌なことを、顔を真っ赤にして、汗びっしょりになって、必死に訴えてくる。それがときどき、むしろにうらやましくなってしまう。

オモチャを手当たりしだいに渡しても、豪のご機嫌は直らなかつた。しかたなくベビーサークルから出すと、たちまち這い這いでキッチンに入りそうになる。わたしは「ほら、豪、ボール、ボール、ころころーっ」とリビングに豪を呼び戻して、あとはもう遊び相手に徹^{てつ}した。

晩ごはんの支度は一時中断、服も着替^きえておきたかつたけど、こっちの予定どおりにいかないのが当たり前なんだと割

り切るしかない。

「ごめんね、美帆さん。部活でおなか空いてるのに待たせちゃうね」

美帆さんは、そんなことないです、全然平気です、と笑って応える。笑うだけでなく、微妙に①せつなさにもじんだ表情だった。

「先生……赤ちゃんを育てるって、やっぱり大変ですか」

「まあね。楽じゃないよね」

「でも、学校だとそんな感じ、見えないけど」

「そりゃそうよ」

豪を膝に抱き取って、「仕事は仕事、言い訳してられないんだから」と胸を張った。不思議なものだった。誰にも明かさずに胸の奥に溜め込んでいた弱音や愚痴は②いくつもあるのに、「がんばるしかないでしょ」と笑って言ったとたん、胸がすうっとした。

「……ウチのお母さんも、これから大変になっちゃうんですね」

「たぶんね」

美帆さんは小さくうなずいた。表情のせつなさは、さらに濃くなった。

「苦労かけたり、助けてあげたり、両方やるの、それが子どもと親なんだと思うよ」

美帆さんは声に出して返事をする代わりに、立ち上がってキッチンに向かった。

「なにか晩ごはんつくるの手伝います」

豪はまだ遊びたりない様子だった。凝った料理はあきらめるしかない。

「悪いけど、レンジでチンしちゃおうか」

「全然悪くなんかありません」

「フリーザーを開けてみて。冷凍食品たくさん入ってるから、好きなもの選んで」

はい、と冷蔵庫のフリーザーのドアを開けた美帆さんは、しばらく中を覗き込んだあと、

「こんなのが入ってました」とわたしを振り向いた。手には、市販の冷凍食品ではなく、密閉容器があった。「これ、カレーみたい」

「違うんじゃない？ 最近カレーなんてつくってないし」

「でも、カレーですよ、やっぱり」

「じゃあ、おばあちゃんが置いていったのかなあ……」

母の得意料理はカレーライスだった。ブタの三枚肉よりも野菜のほうが主役の、べつにどうということのない、ごくありふれた味なのに、不思議とおいしい。

「おばあちゃんて、先生のお母さん？」

「そう。忙しくてどうしようもないとき、たまに手伝ってもらってるの」

わたしの答えを聞いた美帆さんは、**D**。

「先生も確にお世話になってるんですね。なんか、仕事も育児もぜんぶ一人で完璧にやってるんだと思ってたから」
失望したり咎めたり、という表情ではなかった。むしろほっとしたような表情だった。

だから、わたしも――。

「それはそうよ。人間が一人ががんばれることなんて、たかが知れてるんだから」

ふだんのわたしなら「ちょっと待ってよ、冗談じゃないわよ」と血相を変えなくなるようなことを、自分がさらりと言えた。

「わたし、このカレー食べさせてもらおうかなあ」

美帆さんは霜が白く覆った容器の蓋をはずして、不意に「あつ」と声をあげた。

「どうしたの？」

きよんとするわたしに、美帆さんは黙って容器を差し出した。

覗き込んだ瞬間、わたしも思わず声をあげそうになった。息を詰めてグツとこらえると、代わりに、まぶたの裏が急に熱くなってきた。

ガンバレ――。

アスパラガスとグリーンピースでつくった文字が、凍ったカレーの上に並んでいた。

「これって……先生のお母さんから、ですよね……」

黙ってうなずくと、まぶたがいつそう熱くなった。目をつぶると、うつすらとした暗闇の中で、母がこつちを見ていた。ゆうべの別れぎわと同じふくれつつらで、目が合うと、いたずらっぽく噴き出して笑って、その笑顔がたちまち揺れて、流れて、頬を伝った。

(重松 清『かあちゃん』)

※注 ・怪訝……理由がわからないで不思議だ、変だと思うようす。

・咎め(る)……悪い行いや欠点などを責める。

問一 ―部①「特別なことはしない、と決めていた」とありますが、なぜ「わたし」はそうしようと決めたのですか。

その理由として最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 「美帆」に特別なもてなしをすると、かえって彼女が気を遣ってしまうと思ったから。
- イ 「美帆」にありのままの生活を見せることで、親子関係の真の姿を伝えられたから。
- ウ 「美帆」は自分の教え子であり、教師が生徒を特別扱いすることは好ましくないから。
- エ 「美帆」は感受性が豊かなので、いくら取りつくるっても簡単に見破ってしまうから。

問二 ―部②「だからこそいとおしい」とありますが、このときの「わたし」の気持ちを説明したものととして最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 中学生は、行動範囲があまりにもせまいので気の毒だ。
- イ 中学生は、大人びているわりには世間知らずであきれてしまう。
- ウ 子どもでもなく、かといって大人でもない中学生は中途半端な世代だ。
- エ 小さな世界で生きているからこそ、中学生は純粋でかわいい。

問三 ― 部③「黙って吊革を握り直し、窓にうつすらと映り込む自分の顔をじっと見つめた」とありますが、このときの「美帆」の気持ちを説明したものととして最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア ふれてほしくないことをずけずけと言ってくる先生に対して腹を立てている。

イ あまり答えたくない話題なので何も言わずそのままやり過ぎそうとしている。

ウ 今の自分にとって重要な問題なので真剣に向き合おうとしている。

エ 予想していた先生からの質問に対してどう答えるべきか考えている。

問四 ― 部④「表情には微妙に不満が残っていた」とありますが、このときの「美帆」の気持ちを説明したものととして最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 保育園に空気がないという現実とはしかに仕方がないが、実際に苦勞を強いられている女性を目の前にとすると、やりきれない気持ちになる。

イ 保育園に空気がないという状況には同情するが、それだけであきらめてしまい、改善しようとしないう先生に対して腹立たしさも感じている。

ウ 保育園の待機児童の増加が社会問題化する中で、こうして苦勞している女性がいるのに何もしてくれない行政に対して憤りをおぼえている。

エ 保育園の毎日の送り迎えに苦勞しながらも仕事を続ける立派な先生に対して、情け容赦なく襲いかかる世間の荒波に無力感をいだいている。

問五 ― 部⑤「答え」とありますが、それはどのようなものですか。「わたし」が「美帆」に示した「答え」に当たる一文を、同じ【第2段落】後半の「わたし」の言葉より二十～二十五字で探し、最初の五字を抜き出して答えなさい。

ただし、会話カッコは字数に含めません。

問六 ― 部⑥「ちっちゃなラッキー」とありますが、これについて次の問いに答えなさい。

(1) ここでの「ちっちゃなラッキー」とは「わたし」が何を指して言ったものですか。文中より二十五～三十字の一文を探し、最初の五字を抜き出して答えなさい。

(2) この後「わたし」には、さらに感動的な「ちっちゃなラッキー」が起きますが、それはどのようなことですか。

【第3段落】の内容をふまえて、三十～五十字で説明しなさい。

問七 ― 部⑦「え、でも、そんなの……」とありますが、このときの「美帆」の気持ちを説明したものととして最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 大切な命なのに簡単に他人に預けようとする先生を不審に思っている。

イ 大切な命なのに自分を信用して預けてくれたことを光榮に思っている。

ウ 赤ちゃんを抱っこさせるために自分を連れてきたのかと納得している。

エ 赤ちゃんを抱っこするとは予想もしていなかったのだとまどっている。

問八 ― 部⑧の空らんには当てはまる四字の言葉を【第2段落】より探して抜き出して答えなさい。

問九 — 部⑨「まだ赤ちゃんのいる暮らしがリアルには想像できないのだろう」とありますが、「わたし」は「美帆」のどのような点からこのように思ったのでしょうか。その説明として最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 子どもの安全を優先した家事の進め方を考えられなかった点。
- イ 子どもの安全よりも自分たちの食事の方が大事だと考えた点。
- ウ 冷めた食事を温めなおすことが無駄な作業だと考えている点。
- エ あと数分もすれば子どもが泣き始めることを予測できない点。

問十 — 部⑩「身□靈」の□に共通する漢字を当てはめて四字熟語を完成させなさい。

問十一 — 部⑪「微妙にせつなさにもじんだ表情」とありますが、なぜこのような表情になったのでしょうか。その理由として最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 大変そうな先生の前で笑っているだけでは失礼だと思ったから。
- イ 先生が自分よりも子どもの世話ばかりしていて寂しかったから。
- ウ 子育ての苦勞を目の当たりにして現実の厳しさを実感したから。
- エ 自分の家でも同じようなことが起きると思うとぞっとしたから。

問十二 — 部⑫「『がんばるしかないでしょ』と笑って言ったとたん、胸がすうつとした」とありますが、このときと同じように、自分の本音を素直に言葉にすることで気持ちが救われる場面がもう一箇所あります。それを簡潔に表している一文を、これ以降の「わたし」の言葉より二十五〜三十字で探し、最初の五字を抜き出して答えなさい。ただし、会話カッコは字数に含めません。

問十三 — 部⑬「A」に当てはまる言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 曖昧あいまいなしぐさで応えた
- イ なーんだ、と笑った
- ウ 納得のいかない顔でうなずいた
- エ 気負いのない笑顔になった